
勇者物語

長野晃輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者物語

【Nコード】

N2195P

【作者名】

長野晃輝

【あらすじ】

さまざまな世界の勇者たちが挑むものは？

e p i s o d e 紹介（前書き）

なんか抜本的に変えました。

もし前の方がいいと思われる方は、……いないか。

episode 紹介

episode 1

『勇者が救った世界のその後』

魔王を倒した勇者レノンワシダフルライフは毎日ぐうたらして素晴らしき英雄生活（プー）を送っていた。

あるとき王様から呼び出されたレノンは、旅の仲間で王の娘のアスヘルと再会する。そして王が一言。「アスヘル、ではレノンと交わり子を成、ぐおおおう！！」

「誰がこんな正義は勝つとか真顔で言うキモい奴と！！」（目が真剣）

え？ そんな。旅の途中では気があるような振る舞いをしていたくせに！！

などと嘆く暇もなく旅の仲間同士の結婚式に呼ばれるレノン。

そのうち世界中のみんながレノンのことを何とも思っていないということが判明した。世界に絶望した勇者は……

episode 2

『拝啓、作者様。僕以外の仲間がみんなメタな件について』

世界を救う旅に出たジノは突然自分の世界が物語の中であることを知る。

そしてジノはその物語の作者霧島久美と会話する能力を得た。

久美と会話していく内に仲間や友人がみんなそのことを知っているような態度をしていることに気づいてしまった。

死亡フラグを理解していた親友に、主人公と絡むことで生存率を上げようと企むヒロインズ、敗北を理解するザコ、死にたくないよ

くと叫ぶ中ボス。

最強の能力、「原作者を従える」を手に入れた勇者はどうするのだろうか。

episode 3

『嫌われ者の末路』

意気揚々と旅に出た勇者フォルアだったが、旅先では誰も協力してくれない！！

それどころか村人に寄ってたかってボコされ追剥にあう。

仲間には裏切られ続け、フォルアは満足に敵とも戦えないという状況に追い込まれる。

装備も真面にならない状況で唯一手を差し伸べてくれたのはなんと魔王のアカネであった。

勇者のパーティにまさかの魔王参戦。

今彼らの世界に対する反逆が始まる。

勇者が救った世界のその後 人物紹介

人物紹介

レノン・カルパネルラ…

世界を支配しようとした魔王を倒した勇者。一応主人公のはずの十七歳。

基本的にぐうたらな性格だが、やるときはやる。熱血漢的な性格もあるが、カッコつけしい。

剣と魔法、それに似合わないが知略にもたけており、戦いでは優れた将の器。

アスヘル・カーニバル…

王国のお姫様。現在十五歳。どこか現実を斜に構えた価値観で見えており、魔王を生み出した責任の一角は王国にあると考えている。

世界を救ったレノンの仲間であるのだが、どうにもレノンとの相性は悪いらしく、平和が戻った後は演技が解け持ち前の毒舌が冴えわたり過ぎている。

次期国王の候補と呼ばれていて、自身にもその自覚があるらしく自信過剰気味。

シロハ・ガーデنز…

王国最強と呼ばれる騎士だった男。二十二歳。

現在は旅の仲間の一人、リリアと小さな村で同棲している。

リリア・ムーリファス…

回復も使える天才魔導師。十八歳。

残念な天然だが、美人のグラマー。かつては教会の聖女だった。

旅の最中はレノンとシロハの間で揺れ動いていたが、シロハを選んだ。

魔王・・

ラスボスのはずが本編ではすでに倒されている。

特に出番はない。

しかし、その最期にレノンに意味深な言葉を残している。

拝啓作者様。僕以外のみんながメタな件について 人物紹介

人物紹介

ジノ・ラブレイ…

傭兵として生活していた。

崩壊に近づく世界で生き別れの妹のファル・ラブレイに会うために旅に出たが、途中帝国の第二王女のシルヴィア・ローファと出会い、ファルと会うことを条件に世界救済の旅に協力するなった。

傭兵をしていただけあって剣の腕はなかなかのもの。

シルヴィアに会う前に霧島久美と会話できる端末を手に入れてしまう。

割となよとした性格でなんだかんだで流さしてしまう。

きりしまくみ
霧島久美…

ジノたちの物語を書いた少女。

小説家を志している。

シルヴィア・ローファ…

作中のヒロインの一人。

ローファ帝国の第二王女。

皇帝や皇族が世界崩壊を受け入れてしまったため、一人でも世界のために動こうと各地の戦士や学者を集めていた。

ゼス・レクツェン…

ジノの親友で傭兵仲間。

凄腕の傭兵で、ジノより先にシルヴィアに雇われていた。

アメリカ・セントライン

魔術師の少女。

シルヴィアに招かれるほどの天才で、世界崩壊の原因を調べている。

サラマンドラとの戦いでジノに助けられて以来、ジノのことが気になる様子。

オルス・ミューゼン..

世界崩壊に向かう中、自由に生きていこうと主義の集団「傍若無人」の幹部。
ヤス

嫌われ者の末路 人物紹介

人物紹介

フォルア・マニューゼ…

本編主人公。勇者に選ばれて意気揚々と旅に出たものの、何故か世界中からアウェー状態。

剣も魔法もまだまだな勇者。（というより修行もさせてもらえない）

アカネ…

世界の敵と言われている魔王の少女。

剣も魔法もかなりの腕、というか世界最強。

極度の照れ屋で、実は何度かフォルアと話をしているのだが互いに自己紹介していない。

リリス・パティス…

追剥にあって装備も満足にならなかった主人公に仕事を紹介した冒険者の女性。

しかし報酬を丸ごと奪った悪人。

ゼファ・ノーデイス…

フォルアを勇者に選らんだ王様。

賢王として名をはせている。

ポーラ…

魔王の腹心の女性。

魔王の代わりによく世間に出ているため、彼女が魔王ということにされている。

ラファイ・エンジェリー…

勇者として選ばれたフォルアが王に会うため城下町であった女性。

episode 1・1 それは伝説に

昔々、といってもそう昔でもありませんが、世界の平和を乱す悪い魔王がいました。

魔王は王国の人々を苦しめ続けました。

魔王は次々と小さな村や町を襲い、その勢力を増大させていきました。

抵抗する人々をもものともせず蹂躪し、破壊し、王国に黒い影を落とし始めました。

魔王は闇より生まれた暗黒の魔物たちを従えていたのです。

人を襲い、その力を喰らった魔物たちから力を受け、魔王はますます力をつけていきました。

魔王軍に立ち向かうために王国はとても強い戦士たちを集めました。

それは八人の若者でした。

一人は王国の騎士。光の加護を受け、魔を滅する力を持つ勇敢な青年でした。

一人は教会の僧侶。神の寵愛を受け、人を癒す能力を持つ優しい少女でした。

一人は魔王に襲われた村の生き残りの戦士。復讐を誓い、悪を憎んだ誠実な少年でした。

一人は王の娘。魔王に立ち向かうために精霊と契約した果敢な王女でした。

一人は世を離れた賢者。その知恵で旅の仲間を助けた聡明な少年でした。

一人は魔王の妹。強大な悪となった兄を滅しようと決意した悲哀の少女でした。

一人は夜の王女。暗闇から生まれ、魔の力を使う人を愛した悪魔の少女でした。

そして、最後の一人は世界に選ばれた勇者。
誰よりも魔王と戦い続けた伝説の勇者でした。

episode 1・2 勇者のその後

首都であるミューネルから西へ馬車で四日ほどの行った山岳地帯の麓に、小さな村があった。

ホボイという名のその村に世界を救った勇者がいた。

彼、レノン・カンパネルはその日も自作したベッドに寝転がり怠惰に一日を過ごす予定であった。

「眠い」

あくびをしながら言うので「ねふい」と周りからは聞こえるのだが、彼の周りには誰一人としていなかったたのでこの解説は無意味である。

勇者だか何だか言ってもこの世界は情報伝達の術があまりない。国王から魔王は倒されたとの発表は有ったらしいが、何分この勇者は食料を買うため以外に外に出ないため噂話すらほとんど知らないのだ。

レノンは冷めた目で窓から見える村の風景と天窓から見える空を見比べていた。

彼のベッドのそばには切れ味を安定させる魔法が掛かっている愛刀が立てかけられている。しばらくこれを抜いた記憶もない。魔王討伐以来、その眷属である魔物たちも姿を消した。

いや、洞窟の奥や森の中を捜せばうじゃうじゃと出てくるのだろうが、少なくとも魔王が健在していた時に比べ、町や村が襲われることは劇的に少なくなった。

故に彼が剣を抜くことはないのだ。

恐ろしいことにレノンはそれを退屈だと感じていた。

平和を望み、そして混沌の象徴たる魔王を倒した勇者の自分がそんなことを考えている。

その矛盾がもたらす恐怖が彼から剣を遠ざけているのだ。

だから、レノンは今日も一日怠惰に過ごすだけ。

バコオオオオ！！

爆発音とともに扉が開かれた。というよりもぶっ飛ばされた。

木製の壁がぶち破れて家の風通しが無駄によくなってしまった。

「やってくれたわねレノン！！何平和なのに家に結界張ってんのよ！！」

「いや！！むしろお前何人んち爆撃してんだよ！！」

飛び起きたレノンが目にしたのは所々焦げたドレスを着た金髪の少女に剣を抜いて向ける。

……さっきまでの解説を返してほしい。

「ああん！？目の前に勇者（笑）の家があったら爆撃したらダメなの？」

対して少女は剣を向けられているくせにおびえもせずチンピラのように睨みを返す。

レノンも目つきを鋭くし、少女ににらみ寄った。

「（笑）って何！？あと普通にダメだろ！！」

「何気に反射の魔法結界張ってんじゃねーよ！おかげでドレスが焦げ焦げじゃねーか！！」

「お前毒舌キャラっていうか、ただ単に口悪いだけだろう！！」

「メタなことぬかすな!!」

その会話が既にメタである。ちなみにメタというのは物語なのにそれを自覚しているような発言や言動を指す言葉である。この場合レノンが毒舌キャラといった部分がメタなのである。説明面倒くさい。

彼女は残念ながら王女のアスヘル・カーニバル。レノンとともに魔王を討伐に行った仲間であるはずなのだが……。

「く、旅の途中はまだお淑やかそうに振舞っていただろうが!!」

この通りのおてんばを通り越してバイオレンスな王女だ。

「そんなもの三日でボロが出たでしょうが!!」

「確かに!!!」

この二人のやり取りは相変わらずなのだ。これを魔王の前にしてもやってのけたのだから、恐ろしい。よくこの二人が入ったパーティーで世界を救えたものだ。

「「確かに!!」」

……地の文へのコメントを禁止する。

「いい加減に用件を話せ!!」

アスヘルのお供の騎士たちによってロープでぐるぐるに縛られ、レノンは馬車に乗せられた。

馬の手綱を握るのは従者かと思いきやアスヘル自身だった。

「さあ、城まで一気に行くわよ!!」

「人の話を聞け!!!」

明らかに勇者の待遇ではない。

まあ、今更そのことを気にするレノンでもなかったが。

それから四日、王都ミューネルに到着すると、宿屋の前でレノンは剣と共に馬車から投げ捨てられた。

「ゴブ!!」

「ゴ布林登場!!」

「何言ってる!!?」

顔を真っ赤にしたレノンはさすがにブチ切れた。そんなくだらない発言が王女に許されるだろうか? いや、許されない!!

「お前いい加減に……」

「ファイアボール!!」

問答無用で容赦無く火炎弾がレノンに降り注ぐ。

「てめえ! リフレクション!」

半透明なドーム状の防御壁が展開された。

「だから返すな!! このクソ勇者!!」

火炎弾から逃れるようにアスヘルは馬車を走らせて去って行った。

「やれやれ、服も汚くなっちゃった」

文句はともかくここまで引っ張られてきた以上何かあるのだろう。とにかく宿を押さえるかと目の前の宿屋に入ろうとしたところで

両手両肩をがっしりと掴まれた。

「あれ!？」

感触が固く冷たい。そしてズッシリと重い。そうまるで金属のような……。

「貴様、街中で魔法を使うとはどういうことだ!!」

がしつと上から下まで銀色に輝く鎧を身に纏った騎士二人がレノンを捕まえていた。

「え!？だってあのクソ王女が俺に向かってファイアボール撃ってきたから防御しただけだろう!」

「貴様!! アスヘル様に向かって何ということをして!! すぐさま牢屋に突っ込むぞ!」

「了解」

「へ!？ちょ、おま!」

ずるずると屈強な騎士が元勇者を引きずり連行する。

「俺は無実だ――!!」

必死に抵抗したが、最近の鍛錬不足が祟って逃れることは叶わなかった。

そのままカーニバル王家が誇る騎士団によって城の地下の牢屋に投げ込まれたレノン。

（なぜだ。あいつら俺のこと知ってないのか？それでも勇者として活躍したんだがな）

実はどうでもいいので、硬い寢床の上でゴロリと寝返りを打つ。その気になればこんな檻ぐらい壊せるのだが、そんなことをしても本当に犯罪者になるだけなので何もしないのだが。

しばらくレノンには眠ろうと目を閉じた。

強行軍でここまで連れてこられてレノンは自分で思っていたよりも疲れていたのだ。

ガシガシという足音で、レノンは目を覚ました。

それは鎧を着たものが歩く際に発生させる音だとレノンは知っていた。

旅の途中、全くその鎧を脱がなかった男がいたからだ。

その足音はまさしくその男が鳴らしていたものと同じだった。

「情けないぞレノン。それでもお前は世界を救った勇者か？」

鉄格子の向こう側から懐かしい声が聞こえる。

上半身だけ起き上がらせ、そこを見る。

聖騎士たる証の白を基調とした鎧が、薄暗い檻の中で輝いて見えた。

「なんだよ。何か用か？」

「人がせっかく会いに来てやったのに、なんて言い草だよ」

呆れたように笑う好青年の騎士。

彼の名はセイマ・オルファース。

この国の現騎士団長である。

「ほざけ。お前、俺がここに入るように仕向けたろ？」

レノンが降りた（というより降ろされた）場所にたまたま騎士が巡回してきたはずもない。その上に町の罪人がわざわざ城の地下の牢に閉じ込められるはずもない。

全ては騎士団長のセイマが自分を城に連れ込むために仕組んだことだと彼は睨んでいたのだ。

「……、ふっ」

鼻で笑うなどレノンは本気で魔術を使おうと思ったが、さすがに国家反逆罪で捕まりたくない。

「お前は逃げるからな。そういう表舞台で持ち上げられることを嫌い過ぎだ」

この男前め、とレノンは目を細める。

「今日ぐらいは勇者として褒め称えられてもいいんじゃないのか？」

……。

「お前が名誉欲とかで勇者になったわけじゃないと俺やアスヘル様、シロハ隊長やリリアもわかっているから」

「あんな。俺がなんで片田舎で生活しているかわからないのか？」

セイマは顎に手を置き、「ふゝむ」と考え込んだ。

「どうしてだ」

諦めたのか牢の鍵を取出しながら、レノンに聞き返してきた。

「勇者勇者っていわれて、見世物になるのが嫌だったからだよ」

もっともあの村はさすがに知らな過ぎて、俺を単なるプーだと思
い込んでるらしいがな。とレノンは口の中だけで呟いた。

ガチャと錆びた鉄が噛み合い鍵が開く音の後に、勇者の面倒そう
な声が地下牢に響き渡った。

牢を開けてもレノンは出る気はないと腕を組んで、どんっと寝床
の上に座り込んだ。

「しかしそれでは困る。俺は国王から直々に言われてお前を城に呼
んだんだ」

「……。というかその国王の娘さんがわざわざ俺をここまで配達し
てくれたんだが？」

「あれはあの方なりのお前への愛情表現だ」

絶対嘘だ。とレノンは半眼になってセイマを睨む。

「いや、そんな目で見るなよ。あの方は迎えの騎士を払いのけて自
分であの田舎まで行っただぞ？『わらわが直々にあやつを連れて
来ようぞ』と言ったそうだぞ」

「……というかアスヘルのキャラ変わり過ぎだぞ」

「そうか？こんな感じだろう？」

こいつ自分の仕える王の娘のことわかってねー！！

悶えるように体を震わすレノンの腕を強引に掴みセイマは彼を牢
から引き摺り出した。

「とにかく何が何でも、今日くらいは表舞台に立ってもらうからな。
これは国王様や王女様の願いであるのだから、異論は認めない」

セイマはそのまま無理やりレノンを連れ出す。

歴史の表舞台に、連れ出した筈だった。

episode 1・3 騎士団長と勇者と

オペラ座のようなホールに観客たちは続々と押しかけていた。

彼らの身分はバラバラで、貴族、王族、平民とその差も関係なく争うように席を取り合った。（ただし、騎士団が見張っているので実際には争えない）

そのホールは王城の敷地内にあるのだが、今日はあるイベントのために解放されていた。

それは世界を救った勇者のお披露目会。
平和を取り戻した英雄の展示会だった。

「いゝやゝだゝ。はゝなゝせゝ」

……これのお披露目会である。
セイマに引きずられ、ホールの裏口でレノン^{レノ}は駄々を捏ねていた。
無駄に力強く気にしがみつ^{レノ}くレノンだった。

「……てめえはガキか!!」

「ガキじゃないもん! 十七だもん!」

「語尾がうざい!!」

仕舞には抜刀しかねないほどの二人の言い争い周囲で忙しそうにしていた給仕たちが一瞬ちら見して、何もなかったかのようにあくせく働き始めた。

彼女たちは忙しいのだ。

二人とも鞘に手を当て、今にも剣を抜こうとしながら睨みあった。

「お前とやるのは久々だな、レノン？」

「ああそうだな。今までお前が勝ったことはないけどな」

「ぬかせ。俺は今でも鍛錬を欠かしてないんだよ。てめえとは違うんだ」

「それでも、負ける気はしないがな」

二人はほぼ同時に剣を抜いた。

「馬鹿な真似はやめたまえ」

二人の剣が鞘から抜ききる寸前。突如二人の中間に白いローブを着た青年が現れた。

急ブレーキをかけた二人の刃は、青年の首を切り落とす直前で止まった。

「はあはあ。危ないですよ。マーズ・イルマ様」

冷や汗を流すセイマが非難めいた口調で言う。

マーズと呼ばれた青年は冷めた目でセイマを見つめる。

「よく言う。セイマ・オルファース。貴様はもう騎士団長ではないのかね？平団員時代のようにどこでも私闘が許されるような存在ではないはずだ。違うかね」

当然だが、騎士団に限らず、真剣での私闘は禁止されている。騎士団長がそれに反してしまえば、面目丸つぶれだろう。

セイマは苦虫を噛み潰したような顔をして剣を鞘に納めた。

マーズは満足そうに頷き、次に振り返ってレノンを睨んだ。

レノンは未だに剣を下ろせずに、マーズが現れた時と同じ体勢を解けずにいた。

彼は荒い呼吸を繰り返してはいたが、全く動く様子はなかった。

マーズは剣に指を添え、そっと首元から外した。

「……情けないな。レノン。かつての君なら刃を止めるだけでなく、彼の剣を弾き飛ばすぐらいはできたんじゃないのかね」

電撃に撃たれたようにレノンの体がピクツと反応した。

実際にその通りだった。レノンは動こうとした。だが、動けなかった。

剣が、重い。

彼は刃がマーズに届かないように抑えるので精一杯だったのだ。明らかに筋力が落ちているのだ。

情けない。マーズの言葉が、重くのしかかる。

「つく！」

無造作に剣を納め、彼はマーズから顔を逸らした。

「……はあ。これだからバカは」

マーズはどこからか本を取り出して庭に植えてある木の陰へ歩いて行った。

二人、気まずい沈黙の中に取り残される。

「……セイマ」

それを破ろうとレノンは彼に声を掛けた。

「レノン。お前さ、いい加減認めろよ。」

世界がお前を選んだんだ。お前は立派な勇者なんだよ」

真正面からこいつは何を言ってくれるんだろうとレノンは顔を背ける。

「でも、今のお前は違うんだな。平和になってその剣を捨てたんだな」

どこか自嘲するようにセイマは笑った。

「……俺は」

「だけど、俺は違う。シロハさんが騎士団を離れてから、俺は団長になったんだ。誰からも憧れられ、騎士の手本として存在する騎士団長に、な。」

だから俺は必死に、平和になっても必死になって毎日鍛錬していたんだ」

「だから、なんだよ」

レノンの心臓が、痛かった。

この痛みは一体？

その答えを捜すには時間が足りなかった。

「……お前も、ずっと勇者でいてくれよ。魔王をその剣で葬って、世界を救った伝説の勇者で、いてくれよ。……誰からも憧れられる勇者で」

セイマはそのまま裏口からホールへと消えていった。

その背に牢屋で見れた騎士団長の輝きはどこにもなかった。

セイマとレノンと同じ村に住んでいた。

幼少期から魔王が現れるまでは。

「さて、ここで黙っててもしょうがない」

声でも出さない限り何もできなそうだったために声を出した。木陰のマーズがプツと噴き出していたが、もう全然まったく髪の毛の直径ほどにも気にしないことにした。気にしたら気にしないのだ。

とにかくこのホールに入って何をすればいいんだろう。

不安しか抱かないがとりあえず進んでみると、そこは舞台裏のようだった。

左手はおそらく観客でもいるのだろうか。落ち着きなく騒ぎが続き

外見だけの天使がいた。

それはアスヘルだった。金色の髪をアップで留めて、新雪のような白いうなじを曝し、背中の開いた大胆なドレスを着て、彼女本来の美しさを引き出すように薄く化粧している。

一体何をしたいのかよくわからないようにレノン^{レノン}は頭を抱えた。

アスヘルはその性格さえ無視できれば理想的な女性なのだ。

レノンだって男だ。そりゃ当初のお淑やかなお姫様のままなら惚れていただろう。

化けの皮がはがれた今はもう女性ではない。何というか、気の合う友人、いや、話していると楽しいやつとしか見れない。

はずなのだが……。

（どうしたことだ。顔を直視できない）

しかも、今は盗み見ているだけである。

これを直に顔を突き合わせたらと考えると火が出そうだった。思春期の乙女か！！と自身に叱咤してやりたい。

アスヘルは何か本のようなものを黙読していた。

一体なんなのだろうと目を凝らしていると、足元の床がパキリと音を立てた。

ギョツと一本の棒のようにまっすぐに背筋を張り、レノンは硬直した。

音に反応したアスヘルと目があつた。

「……何、覗いてんだよあああ！？」

どこのチンピラだとツツコむ前に火球が飛んできたので、水球で
ファイアボール
アクアスファイア
消火した。

「お前は出会いがしらに攻撃しないと気が済まないのか！？」

「あんたのそのツラを焼却処分したら攻撃しないわよ！」

「どんなけ俺の顔に恨みを持ってんだよ!?」

「恨みはないわ。憎しみだけよ」

「なお悪いわ!!」

顔を突き合わせてながら怒鳴りあう二人は険悪というよりもケンカするほど仲がいいという言葉が思い浮かばれそうだ。

「「喋んな!!」」

ほら、息もぴったり。

「「ほざけ!!」」

だから時の文にツッコむなと……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2195p/>

勇者物語

2011年10月8日02時34分発行